九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Clinical Features of Acute Flaccid Myelitis Temporally Associated With an Enterovirus D68 Outbreak: Results of a Nationwide Survey of Acute Flaccid Paralysis in Japan, August-December 2015

チョン ピン フィー

https://hdl.handle.net/2324/7157407

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

氏　名：　CHONG PIN FEE

論文名：　Clinical Features of Acute Flaccid Myelitis Temporally Associated With an Enterovirus D68 Outbreak: Results of a Nationwide Survey of Acute Flaccid Paralysis in Japan, August-December 2015

（エンテロウイルスD68のアウトブレイクと時間的に関連した急性弛緩性脊髄炎の臨床的特徴：急性弛緩性麻痺の全国調査結果（2015年8月-12月））

区　分：　乙

論　文　内　容　の　要　旨

【背景】急性弛緩性脊髄炎（AFM）は原因不明な脊髄運動ニューロンの関与を伴う急性弛緩性麻痺（AFP）症候群である。われわれは2015年秋に日本で発生したエンテロウイルスD68（EV-D68）のアウトブレイクと同時に多発したAFMの特徴と予後因子を調査した。

【方法】2015年8月-12月に全国調査を実施し、続いてAFM症例集積研究を行なった。放射線画像ならびに神経生理学的データは中央レビューを受け、利用可能な検体に対してはウイルス学的検討が行われた。

【結果】小児55名と成人4名（年齢中央値 4.4歳）からなる59症例のAFM（確定例58、高可能性例1）が同定された。AFM流行曲線は病原体サーベイランスから探知されるEV-D68と強い時間的相関を示したが、その他の病原体との相関は示さなかった。9名の患者検体からEV-D68が検出され、5名は鼻咽頭、2名は便、1名（成人例）は脳脊髄液、1名（先行してステロイド投与した小児例）は気管吸引、鼻咽頭および血清検体からの検出であった。症例は1肢から4肢まで不均一な肢麻痺パターンを呈していたが、全ての確定例がMRIで脊髄灰白質の縦走病変（中央値20脊髄分節）を示した。59症例中50例（85%）に脳脊髄液細胞増加が認められ、29症例中8例（28%）でギラン・バレー症候群にしばしば見られる抗ガンクリオシド抗体が陽性であった。フォローアップ時に患者52名が何らかの残存麻痺を残した。予後良好因子には、治療前の徒手筋力テストスコア>3、正常なF波出現率、およびEV-D68陰性状態が含まれた。

【結論】EV-D68はAFMの原因病原体の一つかもしれないが、免疫応答などの宿主感受性因子がAFMの発症に寄与する可能性がある。